

## 大内初夫・若木太一著 『俳諧の奉行向井去来』

井上, 敏幸  
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/11980>

---

出版情報：語文研究. 62, pp.91-93, 1986-12-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 「いとど」と「いよいよ」について

山下和弘

## はじめに

「宇治拾遺物語」において今昔物語集に対応する文がある場合の「いとど」は十例あるが、今昔物語集ではこれらのうち六例が「弥<sup>註</sup>」（いよいよ）、「更<sup>註</sup>」と「口<sup>註</sup>」が一例ずつ、他二例は対応する語がない、となっている。また、今昔物語集では「いとど」二例に対し、「弥<sup>註</sup>」（いよいよ）三四四例と、「弥<sup>註</sup>」（いよいよ）偏用となっている。この現象について船城俊太郎氏は「いとど」と「いよいよ」の間に意味の違いはなく、文章様式上の違いであるとしておられる。<sup>註</sup>

しかし、宇治拾遺物語には「いとど」が十九例、「いよいよ」が二十例と、ほぼ同数である。両語の間に意味の違いがないとすると、なぜ一方だけに撰せられずに両語が伯仲する勢いで用いられているのだろうか。もっとも宇治拾遺物語の場合は、先行の説話を類聚したもので、前代の文章がそのままこまれているという可能性もある。が、宇治拾遺物語ばかりでなく、同じころの他の作品でも「いとど」と「いよいよ」はしばしば混じて用いられている。<sup>註</sup>このこと

からすると、やはり両語には何らかの意味の違いがあったのではないかと考えてみる必要があるように思われる。

両語について、かつて原栄一氏は「いとど」は消極的・萎縮的な場面に用いられ、「いよいよ」は積極的・発展的な場面に用いられる。いわば前者は内向的累加表示の情態程度副詞、後者は外向的累加表示の情態程度副詞である。<sup>註</sup>と述べられた。すなわち、「いとど」と「いよいよ」は意味の上では基本的な違いはないが、ある種の、印象の違いとでもいうようなこと（消極的・萎縮的と積極的・発展的）があるのではないかとされたのである。もっとも船城氏はこれに対して、原氏がこのことを指摘された平家物語と宇治拾遺物語の用例を検討したところ、例外が多すぎるうえ、「消極的・萎縮的」及び「積極的・発展的」であるとする基準も曖昧であること<sup>註</sup>で、賛成しかねる、としておられる。

原氏の説は、ある種の印象の違いを両語の間に認めようとするものであるから、このような異論が出るのは不思議ではない。

しかし、船城氏や原氏のいわれるように、「いとど」と「いよいよ」の間には、はたして意味の違いはないのだろうか。

吉沢義則博士は『源語積泉』の「いとゞ」と「いよよ」と「いよよ」と「いとゞ」は物の重疊を示し、「いよよ」は物の進行を示すやうであり、「いとゞ」は「二層」と譯し、「いよよ」は、今の「いよよ」と譯すべきもののやうである。が、平安時代に於ては、大體同義語として用ひられてゐたであらうことは、(ホ)・(ロ)・(ハ)・(ニ)の諸例から察せられやう。この四例の如く、近接して二度用ひられる場合には、用語の重複を避けて、使ひわたりに過ぎないやうに思はれるからである。「いよよ」の方が「いとゞ」よりも力強いやうに感ぜられるが、その一語のみ用ひる場合には、その場合の口調によつて擇んだものでは無からうか」と、述べておられる。両語が大體同義語であるということ「いよよ」の方が力強い、ということに對し、原氏の説は近いように思われる。

そこで次節以下、「いとゞ」と「いよよ」について、その意味と両語の關係を考えてみたい。考察にあたっては、まず原氏の検討された文献である宇治拾遺物語の用例から始めようと思う。それは、原氏がこの中にかの現象の「例外」を認めておられることで注目されるからである。また、このことを通じて吉沢博士の説をも考えることができるように思うのである。

△註▽

- 一、船城俊太郎氏「今昔物語集の「弥」をめぐって」(一)(二)『国語学』136昭58・12、136昭59・3。
- 二、次の表にみられるように、院政期から鎌倉にかけての諸作品に、両語が伯仲した勢いで用いられている。その中で、確かに今昔物語集は異質である。(古本説話集は『古本説話集総索引』、他は日本古典文学大系の本文中の用例数である)

	いとゞ	いよよ
古本説話集	5	6
今昔物語集	2	344
宇治拾遺物語	19	20
保元物語	5	11
平治物語	4	3
平家物語	24	27

古本説話集	5	6
今昔物語集	2	344
宇治拾遺物語	19	20
保元物語	5	11
平治物語	4	3
平家物語	24	27

退官記念・語文論叢・昭53・11桜楓社、においても述べておられる。

四、一と同じ。

五、(ホ)(ロ)(ハ)の用例は次のとおりである。

- (ホ) 廳殿と聞えしは、みや達もおはせず、院かくれさせ給ひて後、いよよいよよあはれなる御有様を、たづこの大將殿の御心にも隠されて過ぐし給ふなるべし。(空蟬巻)
- (ロ) 「…今日は暮も打たでさうぐしや」とて、のぞき給へば、いよよ御衣引被せて臥し給へり。(中略)日一日入り居て慰め聞こえ給へど解きがたき御氣色、いとゞらうたげなり。
- (ハ) かう繪ども集めらるゝと聞き給ひて權中納言いとゞ心を盡して軸・表紙・組の飾りいよよ整へ給ふ(繪合巻)
- (ニ) なつかしき程になれたる御衣どもを、いよよたきしめ給ひて、心ごとくけさうじ暮し給へば、いとゞ心弱からむ人はいかゞと見えたり(權巻)

原氏が平家物語と宇治拾遺物語について「いとゞ」に「消極的・萎縮的」、「いよよ」に「積極的・發展的」な傾向を見出されたこと

とは既に述べた通りであるが、そのうち、原氏自身が例外の存在を認めておられるのは宇治拾遺物語の「いとど」である。氏が例外とされたものとそうでないものには、意味的に何か違いがあるのだろうか。

宇治拾遺物語で氏が例外とされたのは次の三例である。

①潮のみちければ、舟はうきたりけるを、はなつきに、すこし吹いだされたりけるほどに、干潮にひかれて、はるかにみなとへ出でにけり。沖にては、いとゞ風吹まさりければ帆をあげたるやうにて行。

(五六)

②……観音にむかひ奉て、なく／＼申あたる程に……(夢で観音が、助けてやる、頼もしい男をむこにしてやる、という。その日の夕方、旅人の一行が女のところへやってくる。彼らの主人が女を好きになる)……いとほしかりつる事を、思ひかけぬ人のかきて、たのもしげにいひていぬるは、いとかくたゞ観音の導かせ給なめりと思て、いとゞ手をすりて念じ奉る程に……

(二〇八)

③(則光がある夜、盗人を斬り殺した。返り血や刀の血などを始末し、死体を放置しておいたところ、翌朝、知らぬ男が、自分が退治したと威張って説明している)「……」と、たちぬ居ぬ、指をさしなど、かたり居れば、人々、「さて／＼」といひて問ひきけば、いとゞ狂ふやうにしてかたりをる。(二三二)

「いとど」が「消極的・萎縮的」である、とするとこの三例にはどうもそれが見えないと原氏はされるのである。

では、この三例の「いとど」の意味はどうであろうか。

まず①であるが、「いとど」は「累加」の意味を持つということ

考えてみると、「いとど風吹まさりければ帆をあげたるやうにて行」ということの前に、これよりも程度の小さいことがあった、ということになる。それはおそらく「はなつきに、すこし吹いだされたりけるほどに」であると思われる。整理すると、

(一)はなつきに、すこし吹いだされたりけるほどに……

(二)沖にてはいとゞ風吹まさりければ帆をあげたるやうにて行。

となり、(二)の方が(一)よりも程度、この場合は風の強さが大である、という形で理解できよう。

②について①と同じように考えてみると、「いとゞ手をすりて念じ奉る程に」の前にある、「観音にむかひ奉りて、なく／＼申しあたる程に」というのが見える。直接「手をすり」あわせていた、という記述はないが、そういう動作を以て観音に祈って願いを訴えていたと理解してよいであろう。整理すると、

(一)観音にむかひ奉りて、なく／＼申しあたる程に……

となり、(二)の方が(一)よりも心をこめて祈る度合が大であるということになる。

③も同様に、「いとゞ狂ふやうにしてかたりをる」の前に「たちぬ居ぬ、指をさしなど、かたり居れば」と、男が身振り手振りも激しく説明している行動があるのをそれと捉えれば、

(一)たちぬ居ぬ、指をさしなど、かたり居れば……

(二)いとゞ狂ふやうにしてかたりをる。

と整理でき、(二)の方が(一)よりも男の行動が激しいのだということになる。

以上三例を見てみると、「いとど」が修飾する方が前の状況・動作

よりも程度が大である、という形がはっきりしている。しかも、三例とも、「いとど」が来る前に、その状況・動作がより大になるための、「原因」「契機」ともいうべきものがあるように思える。①は、舟が沖に出てしまうことでますます風が強く吹きつったのだし、②は頼もしい男をよこしてくれたことでますます観音を拜むようになったということ。③は男が得意になって話しているところに、周囲の見物人達が「さて〜」などと男をおだててけしかけるために、男はますます狂うようになったということである。つまり、この三例から言えることは、①②③共、(一)とした、「いとど」が修飾するものの方が程度が大なのだが、それは「累加の原因」とでもいうべきものが(一)の上に加わったために(二)のようにますます程度が大になったということなのである。

それでは、原氏が例外とされた以外の用例はどうだろうか。

かくて前にて、生けながら毛をむしらせければ、しばしは、ふた〜とするを、おさへて、たゞむしりにむしりければ、鳥の、目より血の涙をたれて、目をしばたゝきて、これかれに見あはせけるをみて、え堪へずして、立て退くものもありけり。「これがかく鳴事」と、興じわらひて、いとゞなさせなげにむしるものもあり。

(五九)

生きたまま毛をむしるといふ「なさせなげ」な仕打ちをしているところ、鳥が堪えきれずに鳴くの面白がって、ますます「なさせなげ」に毛をむしるのである。この「いとど」の場合にも、ある甚だしい事態があり、それにあることが更に加わって、そのため一層その事態が甚しくなるという構図が明らかになるのである。

年七十餘ばかりなる翁の、髪ははげて、白きともおろ〜あ

る頭に、ふくろの烏帽子をひき入て、もとも小さきが、いとゞ腰かゞまりたるが、杖にすがりて歩む。

(一三六)

これは、もともと小柄な老人であるのが、腰がまがっている、という原因で一層小さく見える、ということである。これもやはり、「一層」甚しくなることについて、そうなる原因がある、という形なのである。

宇治拾遺物語の「いとど」の例をいまままで五例見てきたが、最初の三例と後の二例との間に、意味の違いは見えず、みな同じであるといえると思う。宇治拾遺物語の「いとど」の用例は、あと十四例あるが、これらもやはり同様の形、すなわち(一)よりも、「いとど」が修飾する(二)の方が程度が大であって、(二)に至る原因、というものがあるといふ事で理解できそうである。むろん、すべての用例に、これらの要素がみな明記されているわけではないが、明記されていなくても無理なく推測できるし、推測した方が理解し易くなるのである。

△註▽

一、原米一氏「中世初頭における「いとど」と「いよいよ」の対照的用法について」

なお、宇治拾遺物語の用例は、原氏が日本古典文学大系によっておられ、それを検討することもあり、ここでも同大系本を用いた。以下、本稿での宇治拾遺物語の用例はすべて同大系本による。

二

前節で、「いとど」の意味を宇治拾遺物語の用例で考えてみた。そ

これは、(一)という事態が何らかの「原因」「契機」によって、「いとど」が修飾する(二)の事態に累加する、ということであった。では、やはり原氏がかの傾向を指摘された平家物語の「いとど」の意味はどうかということ、これも同様に理解できそうである。例えば、

忠盛又仙洞に最愛の女房をもてかよはれけるが、ある時其女房のつばねに、妻に月出したる扇を忘れて出られたりければ、かたえの女房たち、「是はいづくよりの月影ぞや。出どころおぼつかなし」とわらひあはれければ、彼女房、

雲井よりたゞもりきたる月なれば

おぼろけにてはいはじとぞおもふ

とよみたりければ、いとどあさからずぞ思はれける。

(巻一、鱸)

これは、忠盛には仙洞御所の女房の中に最愛の恋人がいた、というのが(一)、そして彼女が他の女房にからかわれたときに、和歌を以て優雅にかわしてなおかつ忠盛への愛を表明したというできごとを『原因』として、忠盛が前よりも一層、彼女を愛するようになったというのが(二)である。

平家物語においても、文脈による推測の助けを借りねばならない用例はあるが、それでもこの形にしようとして無理なものはない。

それでは源氏物語の用例はどうであるかという、

むらさきのうへいたうわつらひ給し御心ちの後いとあつしくなり給てそのはかとなくなやみわたり給ことひさしくなりぬいとおとろくしうはあらねととし月かさなればたのもしけなくいとどあえかになりまさり給へるを院のおもほしなけく事かきりなし

(御法)

これを、いまままでに考えた形で捉えると、紫の上が大病をしたあと、快方に向かうでもなくひどく虚弱になった状態が長く続いた、ということが(一)、そして、そのまま年月がたったということが『原因』で、「いとどあえかになりまさり給へる(一層弱々しくなられた)」のが(二)であると理解できる。

やみにくれてふし、つみ給へるほとに草もたかくなり野わきにいとどあれたる心地して月影はかりそやへむくらにもさはらさしいりたる

(桐壺)

これは、桐壺の更衣の死後、彼女の私邸に今やひとりで住んでいる老母を弔負の命婦が勅使として尋ねてくるところであるが、今までと同じ形で整理すると、庭が「草もたかくなり」という表現で荒れている状態を示しているのが(一)、野分が吹きあれたということが『原因』でその庭が一層荒れているように思う、というのが(二)となる。

さるはかきりなう心をつくしきこゆる人にいとよみにたてまつれるかまもらるなりけりとおもふにもなみたそおつる……………さてもいとうつくしかりつるちこかなに人ならむかの人の御かはりにあけれのなくさめにもみはやとおもふ心ふかうつきぬ……………さらはそのこなりけりとおほしあはせつみこの御すちにてかの人にもかよひきこえたるにやといと、あはれにみまほし

△若紫▽

これは源氏が北山で初めて紫の上を見たときからの彼の心の動きである。幼い紫の上を見て、彼女が藤壺に似ていることで深く心をひかれ、藤壺の身代りに自分の心の慰めとしてあの子を見たものだ、と思ったのが(一)、幼い紫の上が実は藤壺の姪なのを知ったことを『原因』として、一層その子をもういちど見たいと思ったのが(二)

と理解できる。

源氏物語の「いとど」も、たいていはこのように理解できる。ところで、吉沢博士の『源語積泉』には、本稿のはじめに引いた他に、いまひとつ「いとど」についての記述がある。「いとど」補説」と題し、「前後の文勢によつて、その場合「一層」と釋くのが適切なやうに思はれる例があつて、或は、翻意として認むべきものがあるかも知れないが、それは後日の研究に残して、「いとど」といふ副詞も「いとどし」といふ形容詞と同じく「いとど」が重なる「甚し」の意を表はすものと、暫く考定したのである」と、考えを変えておられる。そして湖月抄本の本文の「いとど」が河内本では「いとど」になっている例をいくつかあげられ論拠の一としておられる。実は私が源氏物語の用例の中で（源氏物語大成の本文に本稿はよつてゐる）どうしても、(一)『原因・契機』(二)、という形に整理しきれなかつたうちの三例が、そこに吉沢博士のあげておられる例の中で大成本文に存在する四例の中にあるのである。吉沢博士があげられた例をここに出す。

一、いとどいとど憚り多く侍れど、この由申し給へといふ。(明石)

二、聞こえさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむ。  
いとど怖いとどしういとほしと思して后に聞こえさせ給ひければ

(明石)

◎三、入道もえたへで、みづから箏の琴取りてさし入れたり。みづからもいとど涙いとどさへそそのかされてとどむべき方なきに

(明石)

◎四、月おぼろにさし入りていとど艶いとどなる御振舞盡せず見え給ふ。いとどつつましけれど、はし近うながめの給ひける(澤)

標)

○五、はかなく過ぐる月日に添ひて、いとど淋いとどしく心細きことの

みまさるに(澤標)

◎六、わずかに南面の格子上げたる間に寄せたればいとどはした

なしと思したれど(蓬生)

◎は、大成本文にあり、私がかの形に整理できなかつたもの、○は大成本文中にあるが、整理がつき得ると思つたものである。この、「五」は吉沢博士が特に言及して「ひとしほ」の意でないと言されたものだが、やはり整理できるように思う。「淋しく心細き」人は六条御息所の娘(後の秋好中宮)で、このころ母である御息所が死去した。母の死で淋しく心細い状態になった(一)のだが、そんな状態のまま月日がたつていくことが『原因』で、一層淋しさ心細さがまさつてゐる状態(二)、ととればよいと思う。

源氏物語の「いとど」三三五例のうち、あまり自信がない、というものまで含めると、かの形に整理しえなかつたのが約一割あつた。また、諸本間の異同についても考えるべきことがあるが、「いとど」全体の九割は、かの形に整理できるのであり、源氏物語の「いとど」もやはり、前節で出した意味であるといつてよいのではないかと思う。

ところで、この「いとど」から派生したと思われる語に「いとどし」という形容詞がある。この「いとどし」について見てみると、源氏物語の用例で、

みちいと露けきにいとどしき朝きりにいつこともなくまどふ心  
ちし給ふ  
(夕顔)

これは、朝霧が立つというのはよくあることだが、今朝はなせだか、

いつもより濃い、それゆえ、どこともしれず迷ってしまうような気がする、ということ、つまり、

(一) (日頃、霧の深さはこの位だ)

(二) いとゞしき朝きり

そして、この朝は夕顔の死の翌日であり、その悲しみが異様に濃い朝霧の『原因』になっていると考えられるように思う。すなわち、(一)『二』に至るための原因』(二)、という形に整理できる。他の用例もみな、この形で整理できるようである。このことから、「いとど」についての、前節で出した意味は確認できるように思う。

日葡辞書の「Ito-do」の項に次の記述がある。

副詞。非常に、あるいは、深く。普通、反対の事、あるいは対照的な事柄を比較するのに用いられる。

ここでいう「比較」がどんなことであるかは次節で考えるが、日葡辞書に「いとど」が載っているということは、以下の例と関連して興味深いものである。

富士谷成章の『かざし抄』では、次のとおり「いとど」の説明がしてある。

いとど 里言は二様に別けて言ふ。一には『たゞさへ』『いとゞさへ』などいふ。二には『一倍』といふ。回はして心得れば、同じ心になるなり

この記述で注目すべきなのは「里言」に「いとゞさへ」が、「いとど」から派生したことが確実なものとして江戸時代に残存しているということである。また、

イエモウ、店の者が色くな事を教ましてどうにもなりません。ませた口をきゝますに側から附智恵がございますから、い

とゞおしやべりになります  
という用例があり、

(一) ませた口をきゝますに

(二) いとゞおしやべりになります

『原因・契機』——側から附智恵がございますからという形に整理できるのである。これらのことから、かなり後の時代まで「いとど」がその意味を保持して生きてきたように思う。更に、現代でも、東北、関東、四国地方などに僅かに残っている方言の「いとど」の意味もやはり本稿で考えたものと同じようである。

△註▽

一、註三で検討していることだが、吉沢博士は「いとどし」に關し、連体形「いとどしき」は「一層」の意味ではとれないとして「いとどし」を「超甚し」の意としておられる。

二、井上博嗣氏は「中古の程度副詞について——いといとど」といとの場合——『国語国文』37—12 昭43・12で、「いとど」を、述格への響き(呼応)を本質とした強調の副詞とした上で、吉沢博士のこの説を踏まえて「比較の語義を求めにくい」としておられる。

三、吉沢博士は、『源語釈泉』に『副詞形の「いとゞしく」の用例は、さう「一層」という訳語をあてて。山下註』釋いて、大體、無難なやうに見えるけれども、形容詞形の「いとゞしき」となると、「一層」と釋くことに無理を感じる用例が少くない』として三つの用例を指摘しておられる。

その三例を若干検討してみる。まず「かゝる事たえずはいとゞしき世にうき名さへもりいてなむおほきさきのあるまじきことにの給なるくらゐをもさりなん(賢木)である。これは桐壺院の死後、藤壺院にとっても源氏にとっても情勢が悪くなっているときに、源氏との噂がでてしまうことを藤壺院が案じている心中語だが、ただでさええ桐壺院の死後、情勢が



悪くて気苦労が絶えないのに、弘徽殿の太后が、藤壺が中宮の位にあることを非難したときのこと、一層辛く思った、ととるのはどうだろう。そういう「一世」に於て、源氏とこのことが明るみに出るのを心配しているのではないか。

また「とき／＼みたてまつらはいと／＼しきいのちやのひはへらむ」(種)は、年老いた女五の宮が源氏に会うと寿命がのびそうだということだが、現在の命のあやうさと、老令だからいつ死ぬかわからないのは同じだったが以前はもう少し元気だったということの対比ととってはどうか。この女五の宮は桐壺院や兄・式部卿の宮の死後、ひどく心細い思いをしていたともいっている、それが「いとどしき命」になってしまった「原因」と思える。もしくは、他人よりも長く生きているこの命が、源氏と会うことが「原因」で、より長くなりそうだという風にも考えられる。

「うちよりほのめくおひかせもいと／＼しき御にほひのたちそひたれはいとふかくかほりみちて」(螢)これは、御簾の内からもれてくる追い風——衣などにたきしめた香を吹き伝える風——と、源氏のそれよりも高い香りとを対比させているとればよいのではないか。私の見る限り博士のいわれる疑念は起こらないのである。

四、『邦訳日葡辞書』による。

五、『富士六谷成章全集』(竹岡正夫氏)による。

六、『日本国語大辞典』「いとど」の項「方言」に、以下の記述がある。

①はなはだ何々であるのが一段と何々という意を表わす。ただでさえ。「いとど弱いのが病氣をして学校もずっと休んでいる」青森県津軽郡岩手県九戸郡福島郡相馬郡傍路郡島根郡那賀郡下国府(いとどさきも)「いとどさきも雨で干し物がかわかない。なおさら。」よせといえはいとど悪いことをする子だ」青森県三戸郡五戸郡玉泉郡文瀾郡神奈川県那珂市梨卓南巨摩郡那珂郡高知県香美郡横山村押谷(いとど)

なお、平家物語、浮世風呂は日本古典文学大系、源氏物語は源氏物語大成本文

によった。

### 三

「いとど」の意味について、前節まで検討してきたが、それでは「いよいよ」との間に意味上の違いがあるのだろうか。「いよいよ」も「いとど」と同じく、通常、累加の副詞とされていることで、それを手掛りに考えてみようと思う。

(源頼信は平忠恒を攻めたが、要害堅固なところに忠恒がたてこもり、頼信の兵達は不安になった。しかし頼信は地元の者である自分の兵達のうち三人しか知らなかったことを知っていた、そのことを利用して勝った)その後より、いとど守殿(頼信)をば「ことにすぐれて、いみじき人におはします」と、いとどいはれ給けり。(宇治拾遺物語 二二八)

「いとど」に関しては明記はないものの、頼信が忠恒討伐以前も尊敬されていたことを推測すれば足りる。他の多くの用例に明記があるのだから、この場合は逆に「いとど」があるから以前も尊敬されていたのだらうと推測すべきなのである。また、そうとって何も不自然なことはない。その上で、「以前も尊敬されていたのが、勝利の後、一層尊敬されるようになった」までが「いとど」の役割。そして、「勝利の後、ずっと、『一層の尊敬』が増していった」のが「いよいよ」の役割ととれば、こはすっきりと解釈できるように思う。ところで、この用例の中に、「その後より」という連用修飾句がある。これは「いとど」にかかっているのか「いよいよ」にかかっているのか。両方かもしれないが、宇治拾遺物語や他の文献を見回し

ても「いとど」に、「その後より」とか「それよりして」とかいった表現内容の修飾は見られない。これに対して「いよいよ」には

その後、まめやかにさいなむ人もなかりければ、いよく／＼な

ん笑ひあざけりける。(宇治拾遺物語 一二四)

に見られる他、宇治拾遺物語には「それよりして」が一例「いよいよ」にかかっている例が見えるし、明記はなくともそのような文脈だと判断できそうな例もある。先程の頼信の説話の「いよいよ」の解釈、すなわち「勝利のあと、ずっと『一層の尊敬』が、あとあとまで増していった」という表現を担う意味を「いよいよ」が持っているとする、「その後より」が「いよいよ」にかかることが意味的に自然であると思われる。つまり、「その後より」とか「その後はいよいよ」をうけて「いよいよ」が用いられたとき、それは「その後、ずっと事態が増し続けていった」ととるのが最も自然なのである。あとの方にあげた用例でも、この場合、「あとあとまでずっとわらいあざけった」ととるべきである。

そうなると、「いとど」が「その後より」などに修飾される例がないのをどう解釈すべきかというに、「いよいよ」が前二例の解釈であげたような時間的連続の意味を持っているのに対して、「いとど」にはそれがない、ととると、うまく説明できそうである。

また、源氏物語にも、

そのかひなくつれなからむいとおしくなさけなき物に思をか  
れていよ／＼はしめのおもひかなひかたくやあらん (総角)

これは、中君に冷淡な態度をとり続けていると、大君が自分のことを思いやりのない者と思って、これから先も一層、思いがかないがたいままだらう、という薫の心中話だが、薫の思いがかないがたい

状況が将来にわたって増加し続けていく、というとり方が自然である。すなわち、この用例も時間的連続が表わされているものと思える。このような例は「いとど」には見られない。

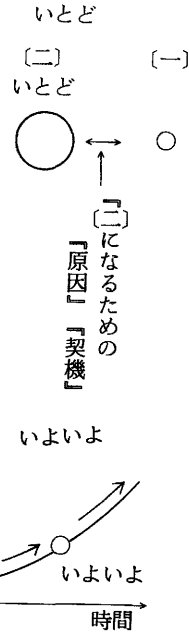
なお、「いよいよ」が時間的連続の意味を持っていることについては、現代語の「いよいよ」もそうであることからいえる。つまり、「いとど」と「いよいよ」の大きな違いは時間的に連続しているか否か、であると考えられよう。そうすると、

(袴垂という盗人がいた。いろいろな物色するうち、ある夜) 人  
みなしづまりはてのち、月のおぼろなるに、衣あまた着たり  
けるぬしの、指貫のそばはさみて、絹の狩衣めきたる着て、  
たゞひとり、笛ふきて、行もやらずねりゆけば、(袴垂はこの男  
の着物をはごうと思ひ、隙をうかがうが、どうも恐しい) そひ  
て、二三町ばかり行けども、我に人こそつきたれと思たるけし  
きもなし。いよく／＼笛を吹ていけば、試むと思て……

(宇治拾遺物語 一一八)

これなど、「いよいよ」が使われているから、笛はずっと吹き続けられていた、ととれよう。「いとど」であれば、時間的連続がないから、途中で笛を一旦やめたのかもしれないともとれることになる。

ところで前節に日葡辞書の「イトド」の記述を引用したが、その中に「比較」という語を使った説明があった。これを加味して「いとど」の意味を考えると、「いとど」が修飾する動作・状況と、その前のものとを対比して表現するところに眼目があるのではないかと考えられる。そしてこう考えることで、時間的連続性がないことが納得できると思うのである。そうすると、「いとど」と「いよいよ」の意味はそれぞれ、次のように図で表わせるように考えられる。



「いとど」と「いよいよ」の違いは、以上のようなことであろうと思われる。しかし、両語には非常に似通った用例が数多くある。

「おのれは、人をうらめしと思ひし程に、かく蛇の身をうけて、石橋のしたに、おほくのとしを過ぐして、わびしと思ひるたるほどに、昨日おのれがおもしろの石をふみ返し給しにたすけられて、石のその苦をまぬかれて、うれしと思ひ給しかば、この人のおはしつかん所を見置き奉りて、よろこびも申さんと思て、御ともに参りしほどに、菩提講の庭に参給ければ、その御ともに参りたるによりて、あひがたき法をうけたまはる事たるによりて、おほく罪をさへほろぼして、その力にて、人に生れ侍るべき功德の、ちかくなり侍れば、いよいよ悦をいたゞきて……」

(宇治拾遺物語 五七)

たとえばこれなど、「いとど」と同じ形に整理できる。

(一)石のその苦をまぬかれて、うれしと思ひ給しかば……  
(二)いよいよ悦をいたゞきて……

【(二)に至った原因】——蛇がついていった人が菩提講の庭に行き、蛇もその功德にあうことができ、もうすぐ人間に生まれる

ことができるようになったこと。

しかし、「いとど」と「いよいよ」の意味の違いは、はっきりとしてゐる。表現内容は、「いとど」の場合とそっくりだとしても、これはあくまで時間の流れにそった増加であり、「いとど」が前の状態とあとの状態を比べるものであるのとは明らかに違ふと考えてよいだろう。

そして、「いよいよ」の用例にはこのようなものが非常に多い。このことから、実際に意味が違うのに、同じであるという誤解が「いとど」と「いよいよ」の間に生じるのであろう。

これを、原氏の「いとど」——消極的・萎縮的、「いよいよ」——積極的・発展的、の考えと結びつけると、次のようになるのではないか。

「いとど」と「いよいよ」の表現内容が同じになることが非常に多いけれども、両語には先述したような意味の違いがある。それも、「いよいよ」は時間的に連続した増加であつて、あとあとまで増加し続けることまで意味の範囲に含まれているようである。これに対し「いとど」は、(一)と(二)の比較が原義である。そうなると、いきおい「いよいよ」の方が積極的・発展的な印象を持つてしまうことも考えられなくはない。——ということではなからうか。私自身、例外的判定に関しては多少のずれがあるが、おおむね原氏のいわれる使いわけがあるように思えた。また、原氏は源氏物語にはこの使いわけがないとされるが、私が見るところ、例外数はかなりあるものの、傾向として認められるのではないかと思えた。それは右に述べたことが原因だとすると、うまく説明がつかうのではないか。そして、こう考えると「例外」も実は例外ではない。意味的にならな障碍が

ないからである。

以上のことから、本稿のはじめにひいた吉沢博士の見解も納得できようである。「いとど」が物の重畳、「いよいよ」が物の進行を示すとされたこともあたってはいるし、『時代別国語大辞典・室町時代編』で、室町時代の擬古作品、抄物などを資料として、本稿と極めて近い解釈が「いとど」になされているのと通じている、両語が大体同義語であると捉えられ易いこと、「いよいよ」の方が力強いように感じられることについても説明がつくように思う。

「いとど」と「いよいよ」には、以上述べてきたような意味の違いがあるものと思われる。また、各種の記述や現代の方言などから類推して、「いとど」はかなり遅くまで口頭語として生きて使われていたと思われる。

『今昔物語集』や『法華百座聞書抄』などに、「いよいよ」偏在の傾向が著しいことは指摘されている通りであるが<sup>註</sup>、今までに述べてきたようなことを踏まえた上で、なお「いよいよ」への偏在が認められるということが問題とされるべきではあるまいか。

△註▽

一、また、和文調の文献では「いとど」が多用され、和歌でも「いよいよ」は殆ど用いられない。